

# 照葉樹林だより

ISSN 1880-8794

てるはの森の会 会報第24号  
2010年12月20日

## 第5回 照葉樹林研究フォーラム ～照葉樹林の自然と生活～ 要旨集



2010年5月21日（金）開催

宮崎県綾町・上畑公民館



**第5回 照葉樹林研究フォーラム**  
**2010年5月21日（金） 綾町・上畑公民館**

もくじ

	要旨ページ
1. ペー族の絞り染め ～ 伝統から現代へ ～ 金少萍 雲南大学西南边疆少数民族研究センター	..... 2
2. 雲南花紀行 魯元学 中国科学院昆明植物研究所	..... 4
3. Living with Nature: A case of Black necked Crane Conservation in the valley of Phobjikha, Western Bhutan (自然との共生ブータン西部のフォブジカ溪谷におけるオグロヅル保護の例) ペマ・ワンダ ブータン農業省再生可能自然資源リサーチセンター	..... 5
4. 照葉樹林文化の中の竹細工 月脚祐子（綾町在住）	..... 8



# ペー族の絞り染め

## ～ 伝統から現代へ ～

金少萍

雲南大学西南边疆少数民族研究センター



### 1、中国の絞り染め

文献資料によると、絞り染めの技術は、秦漢時代にはすでに中原に出現し、唐代に最も栄え、工芸技術は精緻を極め、模様の種類も豊富で、広い地域に流行した。宋代以降は、押し染めの技術が発達したため、絞り染めは衰退し、同時に宮廷から民間へと流出していった。

唐代の古墳から出土した絞り染めの絹織物（新疆地区）



### 2、周城——歴史上有名な絞り染めの村

清代から中華民国期にかけて、周城村には染物屋を営む家が 300 軒以上あり、中には工房や商店として有名になるものも現れた。

農業をもって主要な生業として、布の染色を副業とする。（染物用の甕、石のローラー、（布を）晒す棚）



### 3、ペー族の絞り染めと中原漢族の絞り染めの比較

ペー族の絞り染めと古代中原の絞り染めには多くの類似点がある。

模様の型彫りと押し染め、道具：針と糸、模様を付ける様々な方法（絞る、縛る、縫う）、タデアイ（植物染料）、タデアイを植える、青色の発色方法——タデアイの発酵、タデアイで染める（正藍染）、重ね染めの技術——二次染色、糸抜きと洗浄、いろいろな紋様（蝶の紋様、梅の紋様、水玉紋様、鹿の子紋様）。



### 4、周城村の概況

村は大理盆地の北端に在る。全村で 2000 戸以上、人口は一万人を超え、そのうちペー族が 99% を占める。ペー族のさまざまな民俗が保存されている。村の絞り染めは 2006 年に中国文化部から重要無形文化財に指定された。

村の地理位置：蒼山のふもと、洱海の畔（ほとり）、北側には有名な胡蝶泉の景勝地がある。大理古城から 25 キロメートル離れている。

村の古い建物：竜泉寺（唐朝）、三教の寺廟（仏教、道教、儒教）、本主廟（村の守り神）、民間演劇用の舞台（清朝）。

ペー族の風俗習慣：農事の風俗、本主の祭り、ペー族女性の服飾、伝統的な結婚式。

絞り染めと村民の生活：絞り染めの髪飾り、絞り染めの靴飾り、絞り染めの服飾、絞り染めの婚礼用品、絞り染めの育児用品、絞り染めと農業の習俗、絞り染めの布で龍を作り、雨を乞う。

\*\*\*\*\*

## 5、ペー族の絞り染めと観光業

染まった生産様式：旅行業の隆盛を背景として、二種類の生産方式が出現した。個人宅の作業場での絞り染めと、村の工場での絞り染めである。

絞り染めの商店：村内の絞り染めの商店、大理の絞り染めの商店、麗江の絞り染めの商店。

国外の市場：海外の輸出先は、主に日本である。（日本の歌舞伎のデザイン、京都の風景のデザイン）

新しい絞り染め製品の開発：コースター、テーブルクロス、カバンや男性用のシャツなど、ワンピース。

多彩な絞り染めの模様：伝統的な模様、菊の模様、龍の模様、蝶の模様、現代画の模様、折り鶴の模様

\*\*\*\*\*

## 6、絞り染めと観光業がもたらした村の発展

絞り染め産業と観光業が盛んになるにつれて、村の経済状況はかなり大きく変化し、村民の生活水準も向上した。絞り染めと観光業が村全体の発展を促したのである。

村のゲストハウス、村の道路、村の農民文化センター、村の学校（小学校、中学校）、村の幼稚園、村の図書館。

\*\*\*\*\*

### 金少萍 Jin Shaoping さん プロフィール

1957 年生まれ、北京師範大学歴史学部卒業。雲南民族大学民族研究所講師、助教授などを経て、現在雲南大学西南疆少数民族研究センター教授。専攻：文化人類学。著書『雲南民族の歴史文化研究』（雲南民族出版社 1996 年）、『ペー族の絞り染め——伝統から現代へ』（雲南人民出版社 2001 年）、『雲南特色文化』（共著）（社会科学文献出版社 2006 年）。訳書『ヤオ族の歴史と文化——東南アジア山地民族の社会人類学研究』（竹村卓二著）民族出版社 2003 年、『人類学』（石田英一郎ほか著）民族出版社 2008 年。

# 雲南花紀行

魯元学

中国科学院昆明植物研究所

花は大自然から人類に与えられた芸術品であり、さまざまな彩り、美しい姿、芳しい香り及びそれにまつわる物語などを連想させてくれ、人びとの生活に活気と詩情をあたえる。

雲南は、花卉（かき）資源が非常に豊かで、数多くの有名な花の原産地であると同時に変異を多産する地でもある。雲南には16,000種あまりの高等植物があり、そのうち価値の高い観賞花卉は約2500種類ある。

19世紀初頭、すでに雲南の花卉資源は西洋の園芸学者の憧れを集めていた。彼らは雲南を「園芸家の楽園」とたたえ、相次いで雲南に来て、大規模に花卉を採集し、大量の花卉原種を西洋に持ち帰った。雲南の花卉植物は西洋の国々の庭園景観を根本的に変えたのである。現在、欧米諸国と日本の庭園に一般的に栽培されているシャクナゲ、ツバキ、サクラソウ、リンドウ、ユリ、バラおよびクレマチスなどは雲南から採集され、改良されたものが多くみられる。豊富な雲南の花卉資源は世界の園芸と造園の発展に大きく貢献してきた。

『雲南花紀行』は、2003年日本で出版された中国科学院昆明植物研究所の管開雲と魯元学の著書である。この本では、シャングリラなど十余りの花卉原産地について詳しく紹介し、さらに、437種の雲南野生花卉の地理分布、開花時期及び民間利用などを紹介している。この本は雲南の花卉資源概況をより広く知らしめると同時に、数多くの植物学者や園芸研究者といった専門家の花卉資源の科学研究に役立つのみならず、一般の観光客にもガイドブックとして利用できることを目指している。

この度、著者の一人の魯元学は、この本に紹介した雲南の八大名花を巡って、雲南の花卉資源およびその保護、開発と利用の面に広げて、一部を写真で紹介してみたい。

## 魯元学 Lu Yuanxue さん プロフィール

1968年 中国雲南省生まれ。1993年 雲南師範大学生命科学院卒業後、中国科学院昆明植物研究所入所。絶滅危惧植物の現地調査、繁殖生態の解明、保全の研究に従事。この功績により、雲南省科学技術進歩賞受賞。

1995年から1年間、富山県中央植物園で雲南省産導入植物の栽培指導にあたる。富山県招聘研究員として、園芸植物や貴重な植物の保全法に関する共同研究。現在はイワタバコ科、ペゴニア属、ツバキ属を研究中。2003年、「雲南花紀行」を日本で出版。野生植物の調査、民族植物利用法の研究など、雲南各地でフィールドワークを行っている。論文と共著多数。現職 中国科学院昆明植物研究所 実験師（講師）。富山県名誉大使。

**Living with Nature:**  
**A case of Black necked Crane Conservation**  
**in the valley of Phobjikha, Western Bhutan**

Pema WANGDA  
RNR-RDC-Yusipang, BHUTAN

Phobjikha valley is located at an elevation of 2900 m a.s.l. in the west central Bhutan and is the largest wetlands in the country. The population of Phobjikha is 4716 in 498 households. The Agriculture and livestock are the main sources of livelihood and source of income for the people. About 90 % of foraging ground is covered by small bamboos of *Yushania* and *Arundinella*. The grazing by domestic animals in summer help to maintain the foraging ground to the right height for crane's winter roosting habitat. The valley provides a rare combination of farming practices and conservation of biodiversity with a special reference to the black necked cranes. The cranes are one of the most endangered species of birds, classified as vulnerable by ICUN Red list. The cranes are known as *Thrung Thrung Karm* and are regarded as heavenly birds or "Lhabja" by the Bhutanese people. This is probably one reason why the cranes have been able to live in peace and harmony with humans for hundreds of years. The black necked cranes also feature in many Bhutanese folklore, songs and dances. In line with the harmonious relationship between cranes and human, the arrival of cranes in the valley of Phobjikha gradually increased from 111 in 1990-1991 to 326 in 2009-2010.

The people of Phobjikha valley come together every year to celebrate Crane Festival during the second week of November. After the festival, the villagers together with their cattle, horses and sheep migrate down south at lower altitudes to their winter residence where they have rice fields and winter fodder for their animals. It is the perfect system that develops in the valley for black-necked crane's winter habitat as there is no competition among domestic animals and cranes. Around second week of March, black necked cranes start to migrate to their summer habitat in Tibet while communities with their cattle coming back to Phobjikha. Therefore, Cranes and humans are critically linked with each other in the valley of Phobjikha.

The valley is not totally affected by the forces of modernization and its traditional society, cultural landscapes, natural biodiversity and pristine environment are still intact. However, balancing environmental conservation with development activities will always remain a challenge as people's traditional perception of nature and wildlife conservation changes. In this regard, the Royal Society for Protection of Nature (RSPN), a non governmental organization in close collaboration with the government institution involving communities initiated environment friendly activities such as introducing solar photovoltaic light instead of grid electricity in the valley, community based sustainable tourism, organic farming, crane festivals and more importantly involving students in the conservation activities.

(次ページに日本語訳)

# 自然との共生

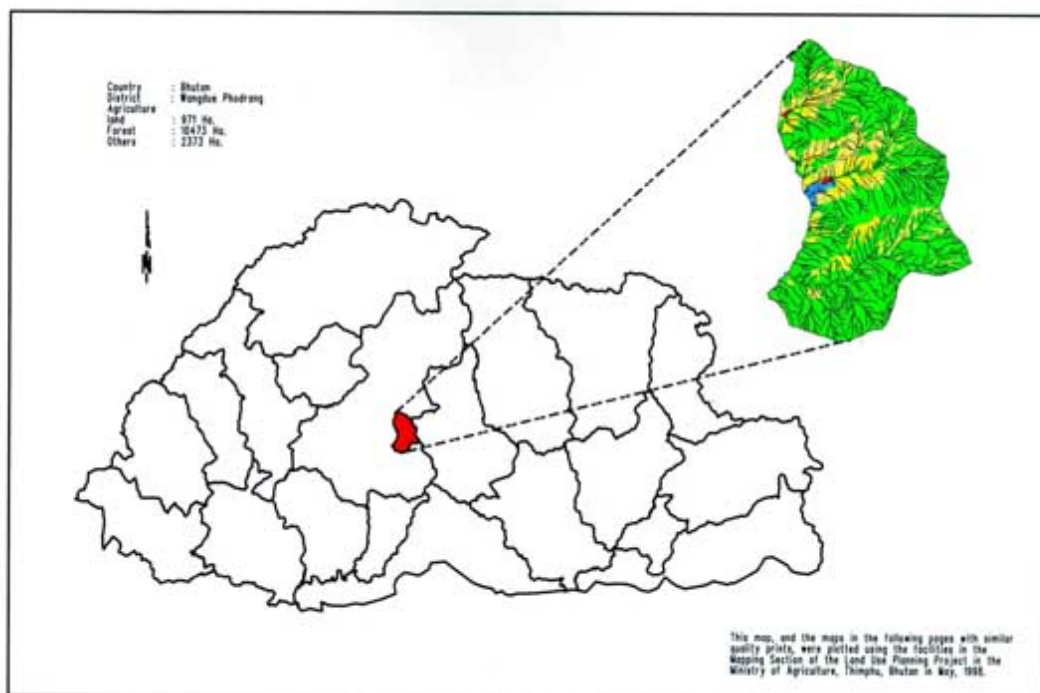
## ブータン西部のフォブジカ溪谷における オグロヅル保護の例

ペマ・ワンダ

ブータン農業省再生可能自然資源リサーチセンター

フォブジカ溪谷はブータン西中央部の海拔 2900m の高さに位置し、ブータンで最大の湿地帯である。人口は 4,716 人、世帯数 498 であり、農業と放牧が主な生活収入源である。牧草地帯の約 90% がユシャニアとアランディネラという背の低い竹で覆われている。夏の家畜の放牧により、溪谷の飼料用地は冬の鶴の憩い場所として最適な環境に保たれる。

ここフォブジカ溪谷は酪農と多様な生物保護、特にオグロヅルの保護とを同時に行っている珍しい場所である。この鶴は多くの絶滅危惧鳥の一種に指定されており、国際自然保護連合によりレッドリストに上げられている。鶴はスラン・スラン・カーム (Thrung Thrung Karm) という名で知られており、ブータンの人々にラハビジャ (Lhabja) つまり“天国の鳥”と考えられている。このことが、何百年もの間、オグロヅルが人間と平和に共存できた理由のひとつであるだろう。オグロヅルはブータンの民間伝承、歌、踊りにも取り入れられている。鶴と人間との調和した関係によって、フォブジカ溪谷に飛来する鶴の数は次第に増え、1990-1991 年の 111 羽から、2009-2010 年には 326 羽となっている。





Black Necked Crane foraging on the crop residues, insects, soft shoots and dwarf bamboo roots

11月の第2週、フォルジカ溪谷の人々はオグロヅル祭りを祝いに毎年集まる。祭りが終わると、村人たちは牛、馬、羊を連れて山を南下し、夏期の居住地から稲作用畑や冬の家畜飼料のある冬期の居住地へと移動する。これは、家畜とオグロヅルが縄張り争いをすることなく、鶴の冬期の休息地確保のために発達した完璧なシステムなのだ。3月の第2週頃、オグロヅルはチベットにある夏の住処へと移動し始める。時を同じくして村人は、家畜をつれてフォルジカへ戻っていく。したがって、鶴と人間はフォルジカ溪谷で互いに深く結びついていると言える。

フォルジカ溪谷は近代化の波の影響をまったく受けておらず、伝統的社会、文化的景観、多様な自然界の生物、素朴な環境がいまだ損なわれていない。しかしながら自然や野生動物保護に対する認識が変化するにつれ、環境保護と地域開発活動との均衡をはかることは難しくなっている。そこで、非政府団体である「自然保護英国王立協会 (RSPN)」は政府機関と密接に協力して、環境にやさしい活動を開始した。その活動には、溪谷地域の送電網に代わる太陽光発電照明の導入、地元社会を拠点とした環境に配慮した観光産業、有機農業、鶴祭り開催の推進がある。そして更に重要なことは学生たちの自然保護活動への参加を促すことである。

ペマ・ワンダ Pema Wangda さん

プロフィール

1972年ブータンパロ生まれ、2004年東京大学大学院新領域創成科学研究科博士課程修了、現在ブータン農業省再生可能自然資源リサーチセンター所属、ブータンヒマラヤにおける標高傾度に沿った植生の変化や更新動態、家畜の放牧など人の利用による植生への影響に関する研究など。現在、ブータン農業省再生可能自然資源リサーチセンター勤務。

# 照葉樹林文化の中の竹細工

月脚祐子

## ◆ アジアは竹の宝庫

- ・アジアには世界の竹林の8割がある。
- ・日本では森林面積の0.38%（人里近くに多く自生し、奥山には少ない）

- 農具 ...ザル、ショウケ、バラ、箕など
- 漁具 ...つり竿、ピク、ウナギポッコ、生かし籠など
- 運搬具 ...背負い籠、腰てご、手さげ籠など
- 調理具 ...ミソコシ、干しザル、茶わんメゴ、メシカゴ、しゃもじなど
- 食器 ...皿、コップ、お箸
- 武具 ...弓、矢、剣道の竹刀
- 建材として ...土壁をぬる時の小舞、天井を組む竹、橋、家など
- 祭・神事など ...誕生から葬式まで、さまざまな祭りのどうぐ

↓  
人生儀礼に竹が用いられるのは竹がこの世とあの世との仲立ちをするから。  
竹の節間の空洞は籠りの場  
死後は神や先祖（ホトケ）として籠った後で再生を果たすという  
期待と祈りの象徴

## ◆ 竹細工はいつ頃から？

竹は日本列島に人間が住みはじめる、はるか以前からあったとされています。  
繰り返される氷河期に一度姿を消したけれど、地球の温暖化とともに  
縄文時代前期にまた繁茂してきたようです。

### ◎ 発掘された遺跡からわかること

- ・福井県、鳥浜遺跡、6000年前 ... 腐蝕しにくい鉱物を含む泥湿地

漆塗りの見事な竹の飾り櫛<sup>くし</sup>

- ・青森県、是川遺跡、亀ヶ岡遺跡 3000年前

籃胎漆器（竹でカゴを編んで漆をぬったもの）

- ・鹿児島、上野原遺跡 ... 縄文最古の遺跡 9500年前、7500年前

高度な土器・石器が多数発見される。

強い酸性の土壌のため、人骨、竹、木など有機物は見つかっていない。残念

### ◎ 文字の記録に残っていること

- ・魏志倭人伝（3世紀頃）
- ・古事記・日本書紀（7,8世紀） ヤマト政権に征圧

ハヤト  
隼人族のこと ... 南九州の先住民族 ... 竹細工・呪術（吠声）

- ・古今要覧稿（江戸時代 文政・天保 今から200年前）  
幕府の命により十数人で編集された**560**巻からなる百科事典  
竹についても詳しく書かれている。400字詰めで350枚くらい！！

◆ 廣島一夫さんのこと

1915年生 95才 宮崎県西臼杵郡日之影町にて80年  
農具・漁具など生活に使う様々な竹細工を作り続ける

1994-95年 80才

アメリカ・スミソニアン協会 サックラー美術館で

「A Basketmaker in Rural Japan」展が開催

渡米して講演。その後、ヨーロッパでも展示され、大英博物館に収蔵される。

◆ <sup>サンカ</sup>山窩のこと

九州、本州の各地に散在していた山の民。戸籍をもたず、資料もほとんどない。

おもに竹細工と川魚獲りを生業としていた。なかでも「箕作り」が得意

時たま里に降りてきて米・塩などと交換

・平安時代の傀儡子記（くぐつき）に出てくる漂泊民

・中世、南北朝時代に鹿児島で島津に敗れて山に隠れた土地の豪族・大前時吉が  
サンカに箕作りを教えてもらったという話

・ヤマト政権からのがれた先住民の末裔か？

明治維新後、官憲におわれ戸籍に入ったり、軍隊に組み込まれたり。

第二次大戦後も山深い地方で目撃されていたが、1952年住民登録令のあとサンカはいなくなったと言われている...

◆ 竹の未来への可能性

今、プラスチックなど石油製品や海外からの安い竹細工のため日本で竹細工をする人は少数になってしまった。竹林は荒れている。

・土にかえる ・切ったほうが竹林が元気になる

・持続可能な素材 ・捨てる場所がない

竹炭、竹の防腐効果を利用した布など

チップにして肥料

竹をもっと利用しましょう

◆ 照葉樹林の里に住んで考えること

世界の中でみても、とても恵まれた森がある場所に住まわせてもらっている幸せを感じるが、他に目を向けると、あちこちで森は減少し、荒廃し、泣いています。

今回のサミットをきっかけに、1人1人がもっと森と仲良くなっていくといいと思います。

ボルネオの先住民族 プナンのこと

月脚祐子 Tsukiashi Yuko さんプロフィール



1969年生。大学で栄養学を学び、管理栄養士の免許をもつが、体をこわしたことから脱線。玄米レストランをはじめ、お客さんに竹細工職人がおられ、竹細工に出逢う。別府で竹の学校にかよった後、注文で様々なものをつくる。2000年綾町に移住。南九州に伝わる「寿司バラ」を伝えてもらって、それを中心に様々な竹籠をつくっている



発行：てるはの森の会

〒880-0014 宮崎県宮崎市鶴島 2 丁目 9-6

みやざき NPO ハウス 403 号

TEL 0985-35-7288 / FAX0985-35-7289

E-mail: [teruha@miyazaki-catv.ne.jp](mailto:teruha@miyazaki-catv.ne.jp)

URL: <http://www.teruhanomori.com>